

第5回日本家族社会学会

日本家族社会学会の第5回大会が1995年9月13日(水)、14日(木)の両日にわたって、千葉市の淑徳大学において開催された。今回森岡清美会長に代わって正岡寛司会員(早稲田大学)が総会において2代目の会長として選出された。また、第3回大会から継続的に報告、討論されてきた「全国家族調査」が学会として本格的に始動することが承認された。

第1日、第2日の午前に自由報告が8題、テーマセッション3つ、第1日、第2日の午後にそれぞれひとつ、計2つのシンポジウムの報告、討論が行われた。とくに、今回「全国家族調査」の予備研究的な性格を持つシンポジウム「日本における縦断研究の方法と課題」で、人口問題研究所の「出生動向基本調査(旧出産力調査)」について報告があり、その成果と課題について、報告者、参加者の熱心な討議が行われた。これは人口問題研究所調査への高い関心を示すものでもあろう。

本研究所からは廣嶋清志、渡邊吉利、若林敬子、小島宏、西岡八郎が参加し、廣嶋、小島の2氏が発表をした。セッション報告、シンポジウムのテーマ、および二人の報告は以下のとおりである。

テーマセッション;

- 1 「わが国における国際結婚とその家族をめぐる諸問題」
- 2 「未婚期の長期化と親子関係」
- 3 「日本の家族と地域性—その3 超高齢化社会に向けて」

シンポジウム;

- 1 「日本における縦断研究の方法と課題」
- 2 「家族社会学の新しい地平—社会階層と家族」

小島宏、「家族政策の基本原則に関する国際比較」(自由報告)

廣嶋清志、「未婚の長期化と家族形成」(セッション報告2)

(西岡八郎記)

経済統計学会第39回全国総会

経済統計学会第39回全国総会は、1995年9月20日(水)、21日(木)の2日間にわたり、北海学園大学を開催校とし、同校内の国際会議場で行われた。今回は『統計学』69、70合併記念号執筆関係報告—2つのシンポジウム(「統計学の課題」および「統計解析」)、「部門統計」(社会統計、人口統計、環境統計や労働統計等)並びに「統計利用」—を中心に19の報告が行なわれた。人口に関連する報告は以下のとおりである。

報告者

論 題

西村善博(大分大学)

「人口問題と統計」

廣嶋清志(厚生省人口問題研究所)

「日本の人口統計の現状と課題」

「人口問題と統計」では人口の高齢化の問題に限って、最近10年間のサーベイが行われ、今後の課題の提示がなされた。その中で、最近行われた高齢化の要因分析や出生率低下の要因分析から、今までの通説とは異なる結果が出されている事や日本の将来推計人口がもつ重要性の故に、推計値の大幅修正が各方面に与える影響が指摘され、人口推計の限界の検討や必要に応じて代替推計の提示が要請されるとしている。地域人口の将来推計では、社会移動の推計が依然として課題であり、また、最近の出生率低下の分析結果がどの程度の小地域まで適用可能かについて検討が必要である。高齢化と雇用・就業問題では21世紀初頭の労働力減少に向けて、今から社会経済システムの構築を準備する必要性や、社会保障統計分野における社会保障費の将来推計の継続の必要性が指摘されている。

「日本の人口統計の現状と課題」では、人口問題に関わる側面を中心にして、人口統計に関する課題の指摘が

されている。それは、人口センサス間における全国標本による人口調査の未実施、外国人の対象除外、年齢別移動人口の統計の欠落、出生、結婚、離婚に関する静態調査、標本調査の不足、世帯の個人別集計（特に高齢者、子供、女性の視点に立つ）による統計の未整備、日本による人口統計に関する国際協力のあり方に関する研究等である。

(山本千鶴子記)

日本人類遺伝学会第40回大会の参加報告

日本人類遺伝学会第40回大会は平成7年9月20日から22日にわたり熊本市民会館で開催された。プログラム内容は特別講演、教育講演、学会賞受賞講演（各1題）、学会奨励賞受賞講演、モーニングレクチャー、ランチョンセミナー（各2題）、シンポジウム2題（10演題）、一般演題218題の発表が行われた。

主だった内容をみると、榊佳之氏の特別講演「新しいフェーズに入るヒトゲノム解析計画—マップからシーケンスへ」では、これまでのヒトゲノム計画5年間の成果は遺伝子地図を中心としたゲノム解析、次の5年間は遺伝子地図をもとに疾病、特に多因子病に関連した遺伝子マッピングの大々的展開、マップ（地図）からシーケンス（配列）レベルの解析へと進展しつつあることが報告された。シンポジウム「奇形の遺伝学」では、中村祐輔氏が「奇形症候群の責任遺伝子のポジショナルクローニング」について報告した。すなわち、染色体異常を指標として遺伝子を追いつめていく方法により、その疾患の原因遺伝子の解明につながるものと考えられると報告された。一般演題の主なセッションとして「遺伝子地図Ⅰ～Ⅵ」（26題）、「DNA診断・遺伝子の構造解析Ⅰ～Ⅲ」（13題）、「多因子遺伝Ⅰ～Ⅳ」（18題）、「染色体Ⅰ～Ⅶ」（40題）、「出生前診断・遺伝相談Ⅰ～Ⅱ」（11題）であった。

総会では「遺伝性疾患の遺伝子診断に関するガイドライン」12項目についての提言があり、それに続き討議が行われた。総会の前日、このガイドラインはマスコミにも公表され、新聞各紙で取り上げられた。

(今泉洋子記)

日本社会学会

第68回日本社会学会大会は、東京都立大学にて9月23、24日の両日開催された。

計52の部会、自由報告論題207を数え、これにテーマ部会4、会長講演が加わる。会員数は2,700人を越えた。今大会の特色を記すと

- (1) 阪神・淡路大震災が地域社会にいかなる影響を与えたか、テーマ部会および自由報告計7本の調査発表がなされたこと。
- (2) アジアを中心とした海外調査報告がめだち、かつ留学生の発表が数多くみられるようになったこと。
- (3) 人口関係としては、「人口・家族形態のコホート分析（中村隆、長谷川公一）」・「有配偶女子就業の家族関連要因（小島宏）」などがあったこと。
- (4) テーマ部会の一つ「戦後の日本社会の成熟と終焉」では、落合恵美子が「世界史の中の戦後日本家族」を発表。「体制（regime）としての戦後日本」について長いスパンの中で女性の主婦化、二人っ子化、人口学的移行期世代による核家族化、1975年以降の家族の個人化、家の終焉等について発表。山田昌弘がこれにコメントした。

他にはエスニシティ、環境関係の若い研究世代が層を広げていることが印象に残った。

これにひきつづく9月25日、上智大学にてアジア社会研究会が開かれた。今年は「現代アジアにおける都市農村の構造連関」を共通テーマにして、フィリピン、タイ、中国の部会を午前、午後は全体会であった。

日中共同調査が広がる中、今回は東北大学を中心とする農村社会学者（細谷昂代表）が中国・河北省社会科学院農村発展研究所（牛鳳瑞）との共同調査発表が日本社会学会にひき続いてなされた。一人っ子政策と社会保障関係で実証的報告がされ、日中共同調査のあり方にも大いなる前進とうけとめられた。

(若林敬子記)